

自己エスノグラフィという自己語りが可能にするもの

山田 瑞紀 (Mizuki Yamada)

早稲田文化館 日本語科

はじめに

人は、ある出来事に際した時、その出来事をどのように体験し、そしてどのように認識していけるだろうか。

もちろん、今起こった出来事を他者に説明する時のように、大抵の場合、人は出来事を体験するだけで、自然と語れ、認識できていると考えるかもしれない。

しかし、そうではない場合がある。例えば、恋人の突然の死、大震災など出来事が人の理解する能力を上回り、圧倒する時、体験した出来事を表現したくても、語り手である人が、それを認識できない時がある。そのような時が、人が出来事を認識できない場合である。

本稿では、この認識できない体験の例として、幼少期および思春期における（以下、子ども）ドメスティック・バイオレンス（**Domestic violence**、以下 **DV**）の被害を据える。子どもの **DV** 被害とは、聞く人の日常を日常として成り立たせなくする衝撃を持っており（例えば、親が子どもの幸福のためではなく、自分の利益のために子どもを利用している、など）、聞き手から出来事の承認を得難い出来事である。それ故に、当事者は、出来事を語り続けられず、語りに対する他者からの承認を得られないことが当事者にその被害を体験として認識していき難くする。

自己エスノグラフィの機能

このような認識し難い出来事を人が体験に変えていくには、その出来事に対し実感の伴った自己語りと、語りによって生じる認識が不可欠である。だが、先にあげたように子どもの **DV** 被害では、当事者が体験した出来事に対する他者による承認が得られないことで、当事者は自己語りを継続できなくなり、出来事に対する認識も保ち続けられない。

自己エスノグラフィは、過去の自分の体験を対象にし、一人称を用ながら、自己が属する文化（今ここにある自己を構成している生活様式）の調査を行う。自己エスノグラフィとは、現在の自己が置かれている立場を振り返る再帰的行為であり、かつ自己の感情を呼び起こしながら振り返る内省的な記述方法となっている。自己エスノグラフィでは、ある出来事を体験した当事者が自分の体験を一人称の物語で示すことで、その人がその出来事をどのように体験したのかを読み手に表わそうとする。

一見（聞）、関連のない出来事が、ある観点から、意味付けられ、語られることでつながりを持って描かれる。例えば、「**DV** 家庭に育つ子どもの日常」という観点から、「子ども」「飼っていた猫の死」「親の不機嫌」という出来事を眺めてみよう。ある観点から独立した出来事同士をつなぎ合わせることで、「子どもが飼っていた猫が死んだのは、子どもが親の機嫌を損ねたため、親が子どもを咎めるために殺された」などの意味を生じさせることが可能になる。

自己エスノグラフィによって、出来事の背景や、当事者の感情などが情報として追加されることで、出来事同士がつながり、一つの物語を形作っていく。これが自己エスノグラフィによって語り手である当事者に及ぼされる、出来事を体験として意味付けるという機

能であり、DV被害を対象にすると当事者が継続した物語の産出を通して、その被害の認識を深めていけるよう働く。

一方、他者（読み手、聞き手）に対する自己エスノグラフィの機能としては、物語調で描かれた当事者の一人称の体験が、その出来事に対する他者自身の捉え方や考え方などの姿勢の明示化を迫る。そのような姿勢の明示化は、他者が当事者の体験を肯定するにしろ否定するにしろ、他者の中立的な立場、あるいは無関心な立場の保持を困難にする。当事者の感情を盛り込まれた一人称の物語によって、他者もまた一人称での物語を表出しやすくなる。いわば他者の当事者性（ある体験に対して、他者がどう関係しているのか）に問いかける機能がある。

参考文献

井上寿美・笹倉千佳弘「児童期に性的虐待を受けた女性サバイバーの自己語りに見る自己回復力-『出来事』を『筋立てる行為』に注目して」『教育研究』43号（2017）pp.1-11.

Elis, C & Bochner, A. P., "Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject," N.K. Denzin, & Y.S. Lincoln, eds., *The Handbook of Qualitative Research (2nd ed)*, (Sage Publication, 2000), (藤原顕訳「自己エスノグラフィ・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」平山満義監訳『質的研究ハンドブック 3— 質的研究資料の収集と解釈』（北大路書店, 2006）pp.129-164.

Bancroft, L & Silverman, J G., *The Batterer as Parent: Addressing The Impact of Domestic Violence on Family Dynamics*, (Sage publications, 2002), (幾島幸子訳『DVにさらされる子どもたち—加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』金剛出版、2004)

藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践』（新曜社、2013）pp.86-93.